



文体への努力 : 季刊同人誌『文体』 (一九七七～一九八〇) 解題と総目次

竹永, 知弘

(Citation)

国文学研究ノート, 55:57-79

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81009656>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009656>



文体への努力

——季刊同人誌『文体』（一九七七〜一九八〇）解題と総目次

竹永 知弘

一 創刊に際して

季刊同人誌『文体』⁽¹⁾は、一九七七年九月に創刊された。同人に名を連ねたのは、いわゆる「内向の世代」⁽²⁾の作家である古井由吉、後藤明生、高井有一、坂上弘の四名（終刊まで同人の増減なし）であり、創刊以来、季刊誌として年四回の出版を続け、八〇年六月の終刊までに全十二号を刊行、総勢一三四名の執筆者による小説や評論、対談、エッセイなど、多岐にわたる趣向の文章を掲載している。発行元は平凡社だが、実際の編集業務の多くは右の作家らによってなされた。定価は七二〇円⁽³⁾で一貫しているものの、終刊号のみが八二〇円となっている。執筆者の原稿料は、後年の古井の謂いによると、「既成作家は一律に（…）みんな五千円⁽⁴⁾」であつたという。版型は一般的な文芸誌と同型のA6版であり、一〜八号までは橙色、九〜十二号は白色を基調に装丁された。表紙絵には、一〜四号は宮崎進、五〜八号までは島田章三の作品が一年ずつ採用されたが、九号以降は各号ごとに作家が変更され、九号は中西夏之、十号は相筈昌

義、十一号は李禹煥、十二号は大沼映夫のものが採用されている。

まずは、『文体』創刊までの経緯を参考資料をもとに確認しておく。古井は自叙伝のなかで、『文体』創刊までの経緯を次のように記す。

五十一年の末から五十二年にかけての冬は例年になく寒かつた。（…）その頃、隔週かときには毎週、月曜日に私たちは集まりを持った。私たちというのは、高井有一、後藤明生、坂上弘と私との四人で、雑誌「文体」の創刊のための相談だった。

右の回想に古井は、同人たちによる『文体』創刊のための会合が「五十一年の末から五十二年にかけての冬」に始められたと証言する。続く箇所では、「五十二年の三月に「文体」の事務所が麹町に設けられ」たことが語られている。また古井は別に、「発足が決まったのが七五年で、終わったのが八〇年で

す⁽⁶⁾」とも述べており、雑誌創刊自体は、その前年の七五年（昭和五〇年）ごろから内定していたことが判る。

なお、『文体』の創刊の発起人は、坂上弘である。創刊の経緯を坂上は、次のように語っている。

皆さんに声をかけたのはぼくで、出発点はぼくかもしれない。雑誌をつくろうということをやんとなく思っていたのは、五年くらいまえなんです。これは、ぼくだけではなくて、皆さんもおもっていたらと思うます（…）⁽⁷⁾。

これは『季刊芸術』（季刊芸術出版）において、古山高麗雄、江藤淳が『文体』の創刊に際し、その同人たちに行ったインタビューでの発言だが、そこで、坂上はおよそ「五年くらいまえ」から雑誌創刊を思い描いていたと答える。これを先の古井の発言と総合すれば、一九七二年頃から同人間で雑誌創刊ということが話題にのぼりはじめ、七五年に創刊を決定、一九七六年冬頃より同人たちが会合を開始し、同人活動が本格的に始動するという成り行きが推定できる。

では、その誌名はいかにして決定されたのか。右に引用した江藤らとの座談会で坂上は、『文体』という誌名を考えたのは、多分、後藤さんじゃないか⁽⁸⁾と述べている。雑誌の命名者として指名された後藤は、次のように誌名の由来を語る。

後藤（…）ぼくは、サラリーマン編集者を十年ばかりやっていて、「ン」のつく題名は縁起がいいという迷信があった。

江藤 運がつくんだね。（笑）

後藤 迷信をかついだというわけじゃないですけど、日本語としても、力強さと締りがあるでしょう。それで「ン」を中心に考えた。⁽⁹⁾

こうして、「ン」の字が含まれた題名として、「表現」や、「海」（中央公論社）をもじった「山」などが候補に挙げられるも、結果的に「文体」という一語が誌名に決定したという。後藤は「文体」なる語が誌名候補に挙げられた瞬間のことを、「結局、投票も何もしないで、「うん、これだ」となった（…）。互いに腹の中で考えてたものが何となく出ちゃったという感じがした⁽¹⁰⁾」と語っている。なるほど、同人間に共有された問題意識を言い当てたものとして、ふさわしい一語であると言つてよいが、他方で、後年に古井は、後藤ら『文体』同人の同席する座談会において、この『文体』という誌名について、「『文体』という題名のつけ方には、おのずからアイロニーがあった。だって、僕なんかその編集後記で、「文体なんてオレらにはない」って書いているんだものね⁽¹¹⁾」と語り、続く箇所では、「文体派じゃなくて、文体困惑派なんだ」と表明している。この点において、「文体」の一語を誌名に掲げることは、「文体」への信条などではなく、むしろ、それを懐疑するものであったことには、留意

しておく必要があるだろう。

なお、古井らによる『文体』誌の創刊に先立って、同名の雑誌はすでに三度、刊行されている。一九三三年に岩本和三郎が文体社から随筆雑誌として発刊したものを嚆矢とし、三八年にスタイル社から三好達治、宇野千代によって、次いで、四七年、文体社から宇野文雄によって発行されたものがそれに当該する。先達らの雑誌について、坂上は次のように語る。

「文体」は戦前、宇野千代、北原武夫、井伏鱒二、三好達治が同人で出した高等的な純文学雑誌でしょう。その「文体」という名前のために宇野千代さんのところにあいさつに行つて、それから小林秀雄のところにあいさつに行つたんです。

戦後でしょうか、「文体」同人には小林秀雄も入つているんです。だから、二人に「文体」という名前を使わせてくださいと許可を得に行けとだれかからいわれて、僕は使者として行つたわけですね。¹³

こうした義理立てが奏功してか、宇野は創刊号に随筆を寄稿している。ともあれ、右様にして、『文体』の名を冠する雑誌は事実上四度目の創刊を迎える。創刊号の売り上げ部数については、「第一回が一万五千部ぐらい売れ」たという古井の後年の発言があり、本誌の発刊が当時、それなりの話題性を有して

いたことが窺知される。おもな同時代の反応として、「内向の世代」の同伴者と呼ぶべき批評家のひとりである秋山駿は、後藤明生との対談で、『文体』創刊に対する所感を次のように述べた。

ほんとうはこれから一人ずつが、それぞれの個性に応じて、ある花を咲かせようとする時期にあたって、逆に、まとまって、一つの雑誌を出そうということをはじめた。普通だったら、文学のグループというのは、最初にそうした雑誌なりをもつていて、そこから一人ずつ分かれて各自の成熟を迎えるということになるわけだけれど、これは逆の現象で、おもしろいと思うんですね。¹⁴

右において秋山は、「成熟」期に入つての同人活動が個々の作家に与える影響について、「おもしろい」として関心を示している。対して、『文体』の創刊が文壇に与える影響に関心を抱くのが、江藤淳である。江藤は、前掲の座談会において、「日本の文学の世界は非常に狭いから、雑誌がひとつ出るだけで地殻変動がおこりかねないところがある。『文体』もそういう可能性を含んだ雑誌だとみなされている」といい、文学者が中心となる『季刊芸術』を立ち上げた自身の経験から、おなじく文学者からなる同人誌である『文体』を、「兄弟分のような雑誌」として「心強く感じ」たと語っている。作家への影響に期待す

る秋山と、文壇全体へ及ぼす効果に関心を抱く江藤と、その関心の所在は異なれど、ともに『文体』の創刊を歓迎する点では共通していると言える。

二 同人の意向

次いで、『文体』がいかなるアピールのもとに創刊されたのを見えていく。本誌には、決意表明としてのいわゆる「創刊の辞」は掲載されていない。秋山との座談会において、後藤が「一人一人が自分だけの言葉でしか書き表すことの出来ない思想を抱いていて、それを自分の文体で書く。そういう、小説を書くのと同じような態度で今度は自分たちの雑誌を出す⁽¹⁷⁾」と述べたように、そこで展開されるのは、あくまでも、「一人一人が自分だけの言葉でしか書き表すことの出来ない思想」を「自分の文体」で書くという個人的な営為であった。よって、ここでは先にも触れた『季刊芸術』の座談会などでの発言から、同人それぞれが創刊への意気込みを確認しておくことにする。

発起人・坂上は、江藤らとの対談において、『文体』を創刊したのは、文壇内にエコールを形成することによる「文学者として生きていくときに、ひとりにならない努力⁽¹⁸⁾」であったと述べた。この意味で、坂上の『文体』での活動は、ひとえに文壇内でのヘゲモニックな戦略であった。たとえば、それは同所で江藤に創刊の意気込みを聞かれ、現状に対する「プラス・アル

ファ」となることを目指すと答える後藤とは反対に、坂上が「ぼくはなんにも付け加えることはない。いい友達を得たということがぼくにはつきりわかっています」と答えている点にも明らかだろう。坂上にとって『文体』とは、いわば「仲間」を得るための場に他ならず、その活動に対してもまた、「小説家が大体同世代で、文学というものを考える。そういうものを編集という形のなかでやっていく。だから共通点はあるし、共通の場もできたし、お互いがプラスになることもできたし、その結果がおそらく文壇にとって豊かになる要素ではあると思う⁽¹⁹⁾」ときわめて楽観的である。

一方、後藤は、「編集ということをあまり意識しないで、自分たちの作品活動の延長⁽²⁰⁾」として、雑誌編集業と執筆業の両立を試みると語る。あくまで作家として編集に関与するという後藤は、秋山との対談において、雑誌創刊に際する新聞記者会見で「スローガンは何か」「現状についていうものに対して何か批判的な立場をとるのか」と質問されたことを振り返りつつ、先にも触れたように、「この雑誌は現状に対する不平不満から作るのではない。現状批判ではなく、現状に何かをつけ加えたい⁽²¹⁾」と述べる。そこで、「つけ加え」るべきものこそが、「文体意識」であると後藤は語る。

プラス・アルファのポイントの一つが文体意識といったものだとぼくは考えるわけです。(….)というのは、現在の

文芸誌の編集目次を総覧してみても、なにか欠如しているものがあるとするれば文体意識ではなかるうかと、ぼくなりに感じたからなんです。⁽²²⁾

別所においても、「戦後以前では、(…)いくら情念があり余り、いくら発表したい意見があつても、あるスタイルを持たなければ表せなかった」と述べる後藤は、ここで、戦後日本語における「文体意識」の「欠如」を指摘し、本誌を現代における「同志諸兄との協同による自由な文体研究所、散文研究所ともいった場所」⁽²⁴⁾にするとの決意を語る。

続いて、創刊の話が聞かされた当初、七五年に共同通信社を退職したばかりであった高井は、再び編集に携わることに「若干ためらいがあつた」⁽²⁵⁾と語っている。だが、結果的に後藤のように、「雑誌をやるのも自分自身の文学表現だという気持ち」で同人に参加し、自分たちが雑誌をやるからには、「雑誌じたいが悪口の対象にでもなるようなものをこしらえなければ、まったく意味がないと思うんです」⁽²⁶⁾と述べる高井は、先にみた江藤の文壇に「地殻変動」を起こす雑誌たることを求める声に反応しつつ、『文体』が文壇的な話題となる雑誌たらんことを志向する。

では、古井の『文体』への意気込みはどうか。「私にとつて、組織らしいものに関与するのは大学をやめてから七年ぶりだった」⁽²⁷⁾という古井は当初、右の高井と同様に、「雑誌をつくると

いう発想は全然なかった」⁽²⁸⁾と発言する。だが、参与するからには、文学者という立場の利点を活用し、「編集者の鬱屈からある程度開放された」、「よじれの少ない目次をつくりたい」⁽²⁹⁾と語る。こうして、『文体』同人となる古井だが、結果的に「文体」という課題にもっとも真摯に取り組んだのは、他ならぬこの作家であつたと見てよい。そうした態度は、たとえば、他の同人が「同人後記」を身辺・文壇雑記で埋めているのに対し、古井のそれが多く、次のような「文体」への問いで埋められている点に看取される。

われわれの「小説の文体」は、いったい何を得、何を失つた結果なのだろうか。何を得、何を失つていく過程なのだろうか。「文体」を得るといふことは、別の光に照らせば、「文体」を失うことにもなるではないか。その逆は、可能なのだろうか。(三号「同人後記」)

こうした「文体」への探究心は、自らが「引用者註三「文体」という語を) 誌名にしたからにはテーマであり、まず自分自身の作品にのしかかる」(四号「同人後記」)というように、同時、創作への負荷でもあるだろう。実際に古井は後年、「親」⁽³⁰⁾のあたりでは、もうフィクションというところに行き詰まった」とその辛苦を吐露している。こうした試行錯誤に、作家としての活動を一貫して「文体」とは何かと問い続ける古井の問題意識

を見て取ることができるだろう。

以上、『文体』創刊にあたる作家たちの決意を概観してみたが、先にも触れたとおり、その具体的な活動は、「文体」を中心的に問題化しつつも、あくまでも個々人によって展開される。本誌のこうした意向から、古井が「文体」の意識のもとに書かれた作品群の中から、内在する文体問題が端的に顕われるのを、待つつもりでいる」（一号「同人後記」）と述べるように、誌上には多様な人物が集結し、それぞれの「文体」観を披露している。では、そこできかなる固有名が『文体』に集ったのかを續いてみていく。

三 寄稿者について

総勢一三四名の寄稿者が『文体』誌上には登場する（対談等を含む）。登場回数では、小島信夫が全号にわたって長編を連載しており、同人を除く最多登場者である。次点として、上田三四二が評論と小説を合わせ、十一回登場。続いて、中野孝次がエッセイを五回寄稿している。

全体的な寄稿者の傾向としては、一瞥して、「内向の世代」周辺の作家や批評家が多いことが判る。たとえば、上田三四二、小川国夫、柄谷行人、黒井千次、大庭みな子、田久保英夫など、多く（広義の）「内向の世代」の文学者たちが『文体』には登場している。同世代に登場した文学者という意味では、

ここに小説家の加賀乙彦、日野啓三、三木卓、米村晃太郎や李恢成、金鶴泳を加えてもよいし、評論家として、川村二郎、粟津則雄や平岡篤頼、高橋英夫、蓮實重彦、桶谷秀昭、山口昌男なども同様に、ここに含めることができる。

だが、本誌に登場する文学者はそれに留まらず、同人たちの先輩作家からの寄稿も多い。たとえば、大江健三郎、三浦哲郎、河野多恵子、丸谷才一、森敦など、高井や古井に先立って芥川賞を受賞した作家らや、大岡昇平、埴谷雄高、山室静、篠田一士、中村真一郎など、いわゆる戦後派の文学者たち、さらには、宇野千代、河盛好蔵、中村光夫、永井龍男、丹羽文雄、山本健吉、尾崎一雄、小野十三郎、唐木順三、川崎長太郎、八木義徳、佐多稲子、新庄嘉章、野口富士男、宮内寒彌など、戦前から文学者として活動していた大家も、『文体』に参加している。そうしたなかでも、登場回数の多いのが、同人たち「内向の世代」の直上の文学世代である「第三の新人」の文学者らである。先述した最多登場の小島信夫をはじめとし、庄野潤三、遠藤周作、阿川弘之、安岡章太郎、三浦朱門、小沼丹などの顔ぶれが、小説や対談で『文体』の誌上を賑わせている。

如上にして、先人らを多く登用する一方で、新鋭作家を多数起用している点も本誌の特徴である。高井は、創刊号「同人後記」にて、『文体』の発刊を船出に譬えつつ、「この船を前進せるのはやはり新風」新人であって欲しい」と述べた。同所に古井も、「一号に一編は新人の作品を載せたいと思っている。創

刊号では望みを果たせなかったが、投稿に期待をつないでいる」と新人の出現を待望する言葉も見える。こうした企てのもと、本誌は、芥川賞受賞直後の岡松和夫や、第三回文学界新人賞受賞者である樋口至宏、のちに「空二の世界」(『海燕』83・11)で芥川賞を受賞する笠原淳などをはじめとし、岩橋邦枝、森山純吉、小関智弘、佐藤睦子、高橋昌男、立松和平、野津決などの若手作家たちに多く執筆の場を与えることに寄与した。また、横山ちはる、吉野英生(村松友規)がそれぞれの処女作を掲載するなど、実際に新人の発掘も積極的に行っている。後年の座談会において、『文体』における新人たちとの関係を古井と後藤は次のように回顧した。

古井 だけど、若い作家に対して、先輩作家が、原稿の段階、ゲラの段階で、これだけ面倒を見たことはないですよ。
後藤 古井さんは立松和平の原稿を全部チェックしちゃったんだもの。⁽³²⁾

こうした新人との関係について、古井は同所において、「高井さんが笠原淳さんの原稿を」「随分いじりました」と続け、さらに「坂上さんが金鶴泳さんをしつこく面倒見ていた」こともまた明かしている。一方で後藤は「村松友規の小説を載せたのは僕でした。まだ「海」の編集部にいたので、吉野英生というペンネームでした」と述べ、村松の「デビューのお膳立てを行っ

たことを回想している。このように、同人たちが新人らにマンツーマンで指導をおこなったという事実は、一般に後続世代との関係を断つたと見られることが多い「内向の世代」の作家らにあつて、意外な印象を与えられる。

右様にして、世代別に『文体』の寄稿者たちを通覧していくことで、本誌は一種、当時の文壇縦覧的な機能を果たしもするのだが、ここで登場者たちの専門分野に目を転じてみれば、もう一つの『文体』誌の特徴として、ジャンル横断的に多様な執筆者が起用されていることが判る。たとえば、谷川俊太郎、鮎川信夫、草野心平、大岡信、辻井喬、吉増剛造、安東次男、飯島耕一、稲垣恵庸、岩田宏、木島始、清岡卓行などの詩人や、創刊号の別役実をはじめ、飯沢匡、木下順二、矢代静一、田中千禾夫、宮原研、演劇評論家の戸坂康二や、ロシア劇研究者の野崎留夫など演劇関係者からの寄稿も多い。さらには、飯田龍太、石原八束、岡井隆、岡野弘彦、金子兜太、木俣修、窪田章一郎、佐佐木幸綱、福島泰樹などの歌人による文章、あるいは、ロシア文学者の池田健太郎、木村浩、新谷敬三郎、アメリカ文学者である大橋健三郎、英文学者の加島祥造、若林真、フランス文学者の佐藤朔、独文学系からは種村季弘、手塚富、坂内正など、研究者・翻訳者の論考なども掲載されている。さらに、『文体』誌上には、文学の領域のみに留まらず、哲学者の沢田充茂や、音楽家の武満徹、数学者の彌永昌吉や、歴史学者の森銚三など、文学外のジャンルの専門家からの寄稿もなされ、多岐に

わたる分野の執筆者による文章が本誌には掲載されることになる。こうした『文体』の原稿依頼の方針について、後藤は次のように語る。

プロの作家や文学者でなくても、医者でも、学者でも、それこそ競馬の好きな人の文章でもいい。(…)実際にどこまで出来るかは一応棚に上げといて、とにかく散文と文体でゆこうと話し合いをしていました。⁽³⁴⁾

実際に『文体』は、「散文」と「文体」をめぐる文章を、分野の垣根を越え受け入れ、多くの執筆者を登場させた。それゆえ、本誌は時にまとまりがないと評される。⁽³⁵⁾だが、先にも引用した古井の、「文体」の意識のもとに書かれた作品群の中から、内在する文体問題が端的に顕われるのを、待つつもりでいる(「同人後記」一号)という謂いに做えば、『文体』の活動とは、むしろ、そうした雑多な量をもって、「文体」の本質を炙り出すという試みに他ならない。右様の方針に基づき、本誌は小説作品と評論を中心としつつ、対談やシンポジウム、文芸時評など、さまざまな企画を展開していくのであるが、ここで、『文体』に掲載された主だった作品や企画がどのようなものだったのかを確認していく。

四 内容について

はじめに、『文体』誌上に発表された小説を概観する。まず、後藤明生の「吉野大夫」は、『文体』九・十二号に連載された、隠れキリシタンとして処刑された信濃追分宿の遊女であったという吉野大夫をめぐる伝承をたどりつつ、それを小説にしようとする作家「わたし」を主人公とする一編である。柘植光彦が「迷宮から抜け出せずにいる語り手の想像や判断、また村人の反応などを述べることで、小説の世界が自己増殖を続けていく。後藤明生の方法が鮮明に表現された作品⁽³⁶⁾」と評すように、小説家の連想や苦悩がそのまま語られるという方法が採られているのだが、如上の小説的方法について、後藤明生は『文体』「同人後記」において、次のように解説している。

「吉野大夫」は、書きながら考え(考えながら書く)という書き方をしたのでご覧のようなものになったがひとまず完結とした。不満が生じれば何かの形で補充しようと思う。

(十二号「同人後記」)

右の発言に違わず、実際に一編は「吉野大夫のことについて考えてみようと思う」と始まり、単行本化の際には「補充」として、『吉野大夫』注(『文学界』80・7)を付録している。この〈小説を書くことについて書いた小説〉は、やがて、田地

文字らに賞賛され、第十七回谷崎潤一郎賞を受賞、作家の代表作と呼ぶべき一作となる。以後、後藤がこうした離散的な（いわゆる「アミダクジ式」の）叙法へと傾倒していくことはないまま改めて指摘するまでもないが、作家のそうした変遷を思うとき、本誌に「美濃」（一〇十二号）を並列して連載していた小島信夫との関係を看過することはできない。自身の来歴をめぐる伝記の作成という主題をもちながら、その一方で「文体読者」に向け語りかけるなどの方法的な仕掛けを多く含み持つ「美濃」の一作は、後藤の「吉野大夫」と通底しながら、近代小説の解体を試みる作家らの意向を端的に表明している。

こうした後藤や小島のパフォーマティブな小説に対し、古井由吉が『文体』誌上に連載した作品は、坂上や高井の諸作と同様、伝統的な私小説の風土を思わせるような、リアリズムの形式を踏襲している。先立つて発表されていた『聖』なる一編の登場人物を継承しつつ、続編として書かれた連作『栖』（一〇六号）、『親』（七〇十二号）と題された作品がそれである。主人公は、岩崎と佐枝と名指される男女であり、『栖』において、二人は子を授かり、同居を始める。しかし、子育てに鬱ぎ、やがて女は狂い、精神を病み入院するあたりで一編は幕を閉じる。女は続編の『親』にて退院、「親」の主題のもとにその男女は、男の母親の急死や、「聖」で描かれた女の故郷への帰郷などを経験する。如上のあらすじをもつ作品を『文体』に連載することを決めた際の心境を、古井はこのように語る。

その頃、私は短編のほうを書きたかった。ちょっと微妙なテーマを引き寄せていて、その周囲をすこしずつ異なった距離から、短編でめぐってみたいと思っていた。しかし雑誌をつくるからには、もつと筋の太い、ひとつながりの作品で押してみるべきだろうな、と思いかえした。そこで困惑したことだ。というのも、ひと筋に押すべきものとして私にはさしあたり、「聖」のつづきしかない。これはしかし、もつと先の仕事だと感じていた。前の作品を締めたときの疲れがまだ残っていた。しかしまた、長いものなら、ほかにやることもない。⁽³⁷⁾

右の逡巡に明らかのように、『栖』『親』の二作は、『文体』連載のために急遽、執筆を決めたものである。たとえば、先に触れた古井の『親』での「フィクションへの行き詰まり」は右様の窮状に由来してもいるだろう。ともあれ、こうして、古井という作家の履歴における現状唯一の続編作品が執筆されるのだが、その成立の背景には右のような事情があったことをひとまずここで指摘しておく。

以上、後藤と古井の作品紹介に紙幅を割いたが、無論、その他にも重要な作品は多く掲載されている。たとえば、先に触れた小島信夫「美濃」もその一つであるし、遠丸立が『文体』の創刊号、二号、にざっと目をとおしたかぎりでは四人の同人中高井有一の作品が比較的読者の目を牽く⁽³⁸⁾と評していたよう

に、「或る誘拐」(一号)や「夜の音」(二号)をはじめとする高井の諸作も囁目に値しよう。さらに、坂上が連載した「故人」(一号〜八号)は先輩の作家・上條の逝去を発端として、山崎が「ゴドモ」の季節からの脱却するという成長譚であるが、上條は山川方夫がモデルとされ、その他、江藤淳や北原武夫など『三田文学』の周辺の文学者と覚しき作中人物が描かれている点から、作家の伝記的交友録として読むことも可能だろう。また、上田三四二の小説「転校」(六号)は氏の十七年ぶりの小説であるなど、話題は語るに尽きない。だが、小説への言及はこゝらで措き、続いて本誌に掲載された評論へと話題を転じた。

右に見てきた小説作品に加え、『文体』誌上では、企画「文体とは何か」が連載され、一人十五枚ほどの評論が毎号四〜六本ずつ掲載された。創刊から八号まで続く企画であり、「文体」の名を冠された本誌において、もっとも中心的な企画であると言つてよい。いくつか特徴的なものを見ておけば、たとえば、自身も独文学者であり翻訳者でもあった古井の「翻訳という行為にこそ、文体をめぐる労苦およびさまざまな事情が、もっとも端的にあらわれるという考え」(「同人後記」六号)からか、大橋健三郎「翻訳と文体」や磯田光一「言文不一致考——翻訳文体系から何を学ぶか」(以上、二号)など、翻訳における「文体」の問題が何度か取り上げられている。また、詩人や歌人、俳人などが多く参与していたことは先述したが、たとえ

ば、矢代静一「スタイル・パルレ」(二号)などは、仏語で「語られる文体」の意味をもつというその題からも推察されるように、演劇や戯曲における「劇的文体」をめぐる考察であり、ここに「文体」なる概念を小説の領域に限定せず、より広範な意味での「文体」を取り上げようとする意識を看取できる。そうした意味では、「文体」を文化人類学的に論考する、山口昌男「文化の中の文体」(七号)なども特徴的なものであると言える。ここで、山口は、文化における「文体」をバフチンを援用しつつ、「人間の内的発話という観点から言えば、有徴性のある言語・文化因子を、公的な談話の世界につなぎ止めるのがスタイル＝文体であると言える」と文化人類学的に定義する。こうした現代思想の紹介者たちによる論考としては、その他に蓮實重彦「文体の悲惨＝文体の栄光」(五号)があり、バルトのエクリチュール論を参照し、「文体論」の流れを復習することを試みている。一方、「文体」とは、あいまいで、ときにはひとを煙に巻くときに用いられる語である」と述べる柄谷行人は、「文体について」(八号)において、「文体」なるもの不可可能性と、「文体の科学」の欺瞞を揚出する。さらには、多くの論者が「文体」を作家とその作品との連関で考えるという趨勢のなかにあつて、「空白」や「行アケ」「組版形式」などの「物理的な力」を問題とし、フォルムが読者に与える影響から「文体」の問題を考察する吉増剛造「かたちと文体」(四号)は異色といえる。

なお、本企画には評論家や批評家からの論考だけでなく、小説家による文章もいくつか寄稿されている。たとえば、小説家である吉行淳之介「内容と外形の照応」、森敦「文体余話」、大庭みな子「作家と文体」（以上、一号）や、日野啓三「文体」断想」（二三号）などは、それぞれ小説家の「文体」観の吐露として有用である。以上、「文体とは何か」と題された企画に寄せられた論考の内容を概説したが、その他の代表的な企画として、「作家による作家論」（一〜八号）があり、これもまた、それぞれの「作家」の思考を知る上で興味深い。

さて、次の企画の紹介に移る。『文体』誌には、最終号を除き、毎号、対談が掲載された。参加者と題目の詳細は、後掲の総目次の参覧を請うが、たとえば、第一回の大江健三郎と安岡章太郎の座談や、中村光夫と黒井千次の戯曲をめぐる談話など、年代や派閥の垣根を越え、さまざまな分野の論者が登場することで、話題性のある議論が交わされている。なお、後藤の同人後記に、「今回の対談はわたしが担当した。これで対談の当番も一まわりしたことになる。終って速記を見ながら、あれこれ題名を考えてみた」（四号「同人後記」）との謂いが見られることから、各回の登壇者やテーマについては、各号ごとにそれぞれ担当同人がおおむねを決定していたと窺知される。さらに、座談会の中途でときに、「編集部」という名で会話に混じっている人物がいることから、担当の同人は、座談会に同座し、司会のような役回りを務めていたようである。

こうした企画に加えて、一〜八号まで毎号、巻頭にエッセイが四編ずつ掲載されている。宇野千代、河盛好藏、大岡昇平、山本健吉、中村光夫、丹羽文雄、中村真一郎、今日出海、川崎長太郎、埴谷雄高、山室静などの戦前・戦後の大家が多数登場しており、こちらもまた、文壇や読者に対するアピールのひとつとして機能している。一方、雑誌の末尾には、毎号「同人後記」が付されている。長さにして、「通常は十三字の四十五、六行、四百字詰め原稿用紙にして一枚半足らず」だが、「作品を書き終えた身には意外とこたえる」ために、「後記がじつに長く感じられた」と同人の一人が歎いたこと（古井由吉「同人後記」十二号）があったという。こうした煩わしさからか、先述のように古井以外の同人たちの後記は、ほとんどが作家の身辺雑記となっているのが実状である。

最後に、触れておくべき企画に、毎号数編の小説作品を取り上げ行われた、同人たちによる「座談会・文芸時評」がある。座談会の開催場所は、初回のみ、『文体』編集室を構えた麴町の鰻屋「秋本」となっているが、その他の号の座談会は、すべて編集室にて行われた。取り上げられた作家は同人に比較的近しく、『文体』に執筆している者が大半である。なお、第九号からは、「これからは文芸誌の作品ばかりでなく、単行本や、芝居映画も取り上げたい」（坂上弘「同人時評」九号）という方針の転換から、文芸誌掲載作品でなく、単行本についての討論がなされた。しかし、翌十号では「蒲団」と「露骨なる描写」

をめぐって」(昭和五十四年十月五日・編集室にて)、十一号では「正宗白鳥「死者生者」」(昭和五十四年十二月二十一日・同前)と題されたシンポジウムが開催されており、さらに終刊号である十二号においては、「この号には意識して座談会を載せなかつた。(…)雑誌は文章だけで編輯するのが本筋だといふのが、私の偏見である」(「同人後記」十二号)という高井の編集方針から、「文芸時評」の企画は掲載されなかつた。だが、「内向の世代」の同輩の阿部昭への評価や、同世代の作家である吉田知子や中上健次、尹興吉などの作品に対する、古井や後藤の見解を伺い知ることができるとともに、その資料的価値は少なくない。たとえば、中上健次は『文体』の「文芸時評」を次のように評していた。

紀州熊野でたまたま面白いものを眼にした。「文体」春季号の文芸時評である。これはなかなかオモシロイ読物である。(…)このあたりのやりとりは、後に、古井由吉論や後藤明生論、高井有一論を書く者には絶対に欠かせない作家の肉体がよく出た作家の第一級の資料である。(…)³⁹

右に中上が述べるように、『文体』全十二号が、古井や後藤といった『文体』同人の研究、さらには「内向の世代」や一九七〇年代文学の研究における、「第一級の資料」ことは言うまでもない。⁴⁰

以上を『文体』誌上で展開された主な企画の概要とする。こうしてさまざまな企画によって話題性を得てきた本誌も四年刊行を続けたのち、終刊の運びとなる。そこで、次に終刊にともなう同人たちの反応を確認していく。さらに、そうした作業のなかで、『文体』の刊行が、同時代的な文脈において、いかなる意義をもっていたのかを確認しておきたい。

五 終刊に際して

八〇年六月、四年にわたり継続された同人誌『文体』は、終刊のときを迎える。後藤が「当初の予定は二年間で八号を編集することであつた(…)が、われわれはこの「文体」をもう一年続けることに決めた」(「同人後記」八号)と記しているように、十二号をもつての終刊は、もとより決定済みの事項である。しかし、古井が「第一回が一万五千部ぐらい売れました(…)。それが、最後の号ではもうみじめな部数でした。五千部いかない」と述べたように、発行部数の低落が終刊の理由のひとつであることもまた否定しえない。⁴¹

終刊にあたり、同人たちは「同人後記」(十二号)において、それぞれ自己の心境を吐露している。後藤は、謝辞や「吉野大夫」連載の思い出、十二指腸(後藤は『文体』発行期間中に、この病のために二度ダウンし、入院している)のことに触れたのちに、「第一次「文体」がいつになるのかはわからないが、

これをもって第一次最後の後記とする」として、継続への意欲をほのめかし、同じく高井も、「版元の平凡社は、いづれ機会をみて、再刊する意志があると言つてゐるから、そんなに遅くない機会に、別の衣裳を纏つた「文体」が生まれるかも知れない。さうなる事を、むろんわれわれも望んでゐる」と再刊の熱意を語る。一方、坂上はここでも楽天的であり、「五月の連休に子供と二人で鮎釣にでかけた」と始められた「同人後記」の紙幅のほとんどが、鮎釣りの話題に割かれ、『文体』終刊については、その掉尾にわずかに、「連休明けから小誌最終号の出張校正である。それを想うと、この三年目の終りが、ある季節が過ぎるのに似ていると思える」と記されるのみである。また、「同人後記」などで「文体とは何か」を問い続けた古井は、「読者の方にも筆者の方にも文体の問題を押しつけるかたちになつた」ことを反省しつつ、「文体について語つたり書いたりしてもら」つたことに謝辞を述べる。そして、原稿を取りに行つた際に、「文体とは何かとは、君ね、食糧難の時代に、腹いっぱい喰つているかと聞いてまわるのと同じことだよ、と皆から言われたような気がしたものだ」と述べ、「文体」なき時代に、「文体とは何か」を問ふことの難しさを回顧する。

こうして『文体』誌は、その三年にわたる歴史に幕を下ろすことになるのだが、本誌は文学史上にいかにも位置づけることが可能だろうか。たとえば、後年の座談会にて、古井は次のように『文体』の活動の本義を語る。

古井 デビュー当時、我々は長く続いた「近代文学」のしつぽだという意識はありましたね。だから、何か新しいものを打ち出すという意識はありましたよ。だけど、しつぽとして最後に一花という感じもあつたでしょう。この印象はまんざら間違つていないというのは、僕が一番年下でしょう、次の中上までどれだけ年齢が開いていますか。

三浦 中上さんと僕は同じ年だから、古井さんとは九歳違いですね。

古井 だから、僕は長いことしんがりを務めたわけ。しんがりつて心細かつたですよ。

後藤 「文体」は「近代文学」じゃない。

古井 どちらかというところ、その否定。¹⁰⁾

右の座談会において、後藤の「『文体』は「近代文学」じゃない」という発言に反応し、古井は『文体』の活動が、先行する雑誌である『近代文学』（近代文学社）、ひいては広義の近代文学の「否定」を企図していたと語る。ここに同座している坂上・高井・後藤ら、他の『文体』同人たちも特に撤回していないため、これは同人に共通の認識であつたと言える。加えて、本誌の創刊からおよそ一年を経たのちに出版された『文体とは何か』（平凡社、78・11）と題された書籍の「あとがき」（「『文体』編集同人」の連名で書かれたほとんど唯一の文章として、きわめて重要な資料である）には、次のように記されている。

われわれが考えたことは、一言でいえば、文体の重視ということだった。すなわち文学作品の本質にかかわる最も重要なものとして、文体を考えるということである。文体というものを、作家の個性を形づくる最も重要なものとして考え続けるということである。われわれ自身の創作においてはもちろん、作品の評価、批評においてもそのことを中心に考えたいという態度である。(…)われわれは「文体」を、その努力の場所にしたと思ったのである。

この努力は、あるいは、ものみな走り過ぎて行く状況の中では、いささか反時代的なものに見えるかも知れない。しかし、反時代的であればこそ、文体への努力は、文学の必然ではなからうかと思う。ものみな走り過ぎて行く状況の中であるからこそ、「文体とは何か」と問うことは、「文学とは何か」と問うことにならざるを得ないだろうと思うからである。⁽⁴⁾

右に同人たちが記すように、「反時代的」とされながらも、「文体への努力」を続けること。そして、「近代文学」の「否定」として、「文体」ひいては「文学とは何か」を問い直すこと。同人たちの言葉に倣えば、『文体』誌を立ち上げた目的は、ひとえにこの点にあるといつてよい。だが、ここで近代文学の「否定」という言葉を安易に肯定する訳にはいかない。たとえば、創刊の七七年、中上健次が『枯木灘』（河出書房新社、77・5）

を上梓し、前年には村上龍が「限りなく透明に近いブルー」（『群像』76・6）で第七回芥川賞を受賞するなど、後続世代の新人作家たちが目覚ましい活躍を見せていたことを思えば、作家らの意図は措くとしても、『文体』設立の試みが、自らの位置を保存するための党派的な戦略として機能した側面があることもまた否めない。この点において、『文体』の創刊が「文学者としてひとりにならない努力⁽⁴⁵⁾」であった坂上の謂いは正しく、同人らが紙面に先輩作家を積極的に登場させ、さらには新人の育成に意欲的であつたことも頷ける。如上の視座に立つとき、本誌における同人たちの「文体」とは何かというアナクロな問いは、同時に「近代文学」の温存の響きを帯びもするのだが、現状に対する作家らの功罪混濁する苦闘の痕跡として、『文体』誌は、今なお少なからざる価値を有している。

【注】

(1) 後述するように、『文体』と題された雑誌は以前にも三冊存在しているが、本稿において『文体』という場合、特に指示しないものはすべて、七七年、古井由吉らによって平凡社より発行されたものを指す。

(2) ちなみに『文体』以前に、高井・後藤は『犀』（犀の会）、古井は『白描』（音羽書房）でそれぞれ同人活動を、坂上は『三田文学』（三田文学会）の編集を行っている。なお、『白描』については、大谷慎一郎「同人雑誌「白描」解題と総目次」（『立教大

学大学院日本文学論叢』14・9)に詳しい。

- (3) 一〇八号までは、同人たちの共同編集というかたちをとっているが、後藤が「次号からは一人が一号を責任編集する形を取り、少々癖を出したいと思っている」(「同人後記」八号)と記すように、九号より、各号ごとにそれぞれの同人が中心となり、原稿依頼や企画を行っている。なお、「同人後記」から、九号が坂上、十号が後藤、十一号が古井、十二号が高井の責任編集号であると推定される。

- (4) 古井由吉・市川真人・可能源介「インタヴュー——雑誌、同人誌の構想と現実」(「インタビュー」『重力』02・2)

同所には、当時の「他の文芸誌の稿料」が「高いところで五千円、安いところで三〇千五百円から四千元」であったという発言も見え、『文体』誌の原稿料「五千円」が好待遇であったことが窺える。

- (5) 古井由吉「聖の崇り」(『古井由吉作品』第5巻、河出書房新社、83・1)

- (6) 注4に同じ。

- (7) 古井由吉・坂上弘・後藤明生・高井有一・古山高麗雄・江藤淳「『文体』同人と語る」(『座談会』『季刊芸術』77・7)

- (8) 注7に同じ。

- (9) 注7に同じ。

- (10) 注7に同じ。

- (11) 黒井千次・後藤明生・坂上弘・高井有一・田久保英夫・古井由吉・

三浦雅士「文学の責任——「内向の世代」の現在」(『座談会』『群像』96・3)

- (12) 注11に同じ。

- (13) 注11に同じ。

- (14) 注4に同じ。

- (15) 秋山駿・後藤明生「文体について」(『対談』『展望』77・7)

- (16) 注7に同じ。

- (17) 注15に同じ。

- (18) 注7に同じ。

- (19) 注7に同じ。

- (20) 注7に同じ。

- (21) 注15に同じ。

- (22) 注7に同じ。

- (23) 注15に同じ。

- (24) 後藤明生「さきやかな志」(『朝日新聞』77・1・27)

- (25) 注7に同じ。

- (26) 注7に同じ。

- (27) 注5に同じ。

- (28) 注7に同じ。

- (29) 注7に同じ。

- (30) 古井由吉・富岡幸一郎「古井由吉と「仮往生伝試文」」(「インタビュー」『すばる』89・11)

- (31) 注24に同じ。

(32) 注11に同じ。

(33) たとえば、古井由吉・高橋源一郎・山田詠美「権威には生贄が必要」(『鼎談』(『群像』06・7)には、高橋源一郎との次のような応答がある。

古井 僕がある意味じゃ連続性を壊しているかもしれない。徒弟制度というのは大げさだけど、弟子をとって、弟子に影響を与えるってのはね。

高橋 そういうのってやっぱりあったんですか。

古井 ありますよ、第三の新人までは。

(…)

古井 後進に圧力をかけ、影響も与え、邪魔もする……。…
そういう志向が内向の世代で消えたんです。内向の世代って全然まとまりもないし共通項も何もないけど、その共通項はあった。それなもので、その後、ほとんど同時だけど、中上がそれをやろうとして非常に困惑した立場に立ったわけ。

(34) 注7に同じ。

(35) 遠丸立「内向の世代と『文体』」(『国文学解釈と鑑賞』78・8)

(36) 柘植光彦「内向の世代」作家作品ガイド——純文学の輝き」(『国文学解釈と鑑賞』06・6)

(37) 注5に同じ。

(38) 注35に同じ。

(39) 中上健次「物語の系譜——上田秋成」(『国文学解釈と教材の研究』74・4〜5 ↓ 『風景の向こうへ』83・7)

(40) 古井は後年の座談会(注11)において、中上に原稿の執筆依頼を断られたことを明かしている。

中上健次のところに「文体について書いてくれ」と電話したの。そうしたら、中上が「文体のことは考えたことはないけどねエ」というのよ。それを聞いて、あつ、あるいはこいつ、おれらの陣営かと思っただ。

このとき古井は、「文体のことは考えたことはないけどねエ」と踏晦し、執筆の依頼を拒否してみせる中上に「同人たちは文体に関して何も語らないの。人にばかり語らせた」という自身らの意外な類縁性を感じたと回想する。

(41) 注4に同じ。

(42) 『平凡社百年史 1914〜2013』(平凡社、15・6)には、「70年代後半になると、百科事典など「大型セット商品」の販売に陰りが出はじめ、売上高は減少傾向をたどる。79年に完結した新『国民百科事典』は投資が嵩んだ上に販売も伸びず、また企画も資金回収が遅い全集や個人著作集、事典・図鑑が主流であった。準備中の『大百科事典』(85年完結)の編集経費も増大していくなかで資金調達が困難となり、81年2月、戦後1回目の経営危機に陥った」とあり、『文体』の発行元である平凡社の経営が当時、かなりの危機的状況であったことが判る。

(43) 注11に同じ。

(44) 『文体とは何か——24人の文学者が語る』(平凡社、78・11) その内容は、一〜四号までに『文体』に掲載された「文体と

は何か」企画の論考のすべてと、付録に一号の大江・安岡の対談、
二号の吉行・河野の対談を収録するもの。

(45) 注7に同じ。

* 同人誌『文体』(一九七七～一九八〇)は二〇一六年一月現在、
国立国会図書館や日本近代文学館などで閲覧が可能。

(たけながともひろ／本学大学院博士前期課程)

◆書誌

編集人——高井有一
 編集——後藤明生・坂上弘・高井有一
 古井由吉
 発行人——馬場一郎
 編集室——株式会社文体社
 東京都千代田区麹町三丁目二番
 地相互第一ビル2F
 〒102
 発行所——株式会社平凡社
 東京千代田区四番町四番地
 〒102
 東京(〇三)二六二・六三〇九
 代表振替・東京八二九六三九番
 印刷所——東洋印刷株式会社
 製本所——株式会社石津製本所
 定価——七二〇円(十二号のみ八三〇円)
 送料——二〇〇円

◆総目次(執筆者名、題、ジャンル、開始頁を順に記した)

- 一九七七年・九月・創刊号——一号
- 字野千代「二つの文体」〔エッセイ〕……………10
- 金澤誠「文體」戦後版のころ」〔エッセイ〕……………11
- 河盛好蔵「二つの創刊号」〔エッセイ〕……………13
- 大岡昇平「文體」の思い出」〔エッセイ〕……………15

【特集——文体とは何か】

- 吉行淳之介「内容と外形の照応」〔評論〕……………18
- 川村二郎「文体について若干」〔評論〕……………24
- 森敦「文体余話」〔評論〕……………30
- 加賀乙彦「私の文体観」〔評論〕……………36
- 大庭みな子「作家と文体」〔評論〕……………42
- 別役実「言葉から文体へ」〔評論〕……………48
- 水上勉「語り、文体、それから」〔評論〕……………54
- 安岡章太郎、大江健三郎「作家と文体」〔対談〕……………60
- 三浦哲郎「山麓記」〔エッセイ〕……………88
- 富士正晴「虚子——作家による作家論I」〔評論〕……………102
- 丸谷才一「詞華集の人間」〔評論〕……………114
- 柄谷行人「地底の世界——漱石論」再考」〔評論〕……………124
- 上田三四二「内なる自然(一)——わが生の身体的検証」〔評論〕……………140
- 小島信夫「ルーツ*前書」〔小説〕……………162
- 田久保英夫「幻燈」〔小説〕……………176
- 尾高修也「部屋の明るみ」〔小説〕……………190
- 坂上弘「故人」〔小説〕……………274
- 高井有一「或る誘拐」〔小説〕……………298
- 古井由吉「柄」〔小説〕……………316
- 後藤明生「大阪土産」〔小説〕……………358
- 「文芸時評」(座談会)……………375
- 「同人後記」……………392

●一九七八年・一月・新年号——二号

- 尾崎一雄「大岡龍男さんのこと」——富士正晴「虚子」に触発されて」〔エッセイ〕……………10
- 井上靖「トルファン街道」〔エッセイ〕……………14
- 唐木順三「屍」〔エッセイ〕……………17
- 佐多稲子「微妙なある説後感」〔エッセイ〕……………19

【特集——文体とは何かII】

- 矢代静一「スティル・バルレ」〔評論〕……………22
- 飯島耕一「詩の「文体」」〔評論〕……………28
- 大橋健三郎「翻訳と文体」〔評論〕……………34
- 磯田光一「言文不一致」考——翻訳文体史から何を学ぶか」〔評論〕……………40
- 吉行淳之介、河野多恵子「文体への二つのアプローチ」〔対談〕……………46
- 庄野潤三「キャビュレットの召使」〔エッセイ〕……………72
- 三木卓「牧野信一論——作家による作家論II」〔評論〕……………83
- 上田三四二「内なる自然(二)——わが生の身体的検証」〔評論〕……………98
- 小島信夫「ルーツ*前書(二)」〔小説〕……………122
- 立松和平「ブリキの北回歸線」〔小説〕……………124
- 高井有一「夜の音」〔小説〕……………139
- 後藤明生「三十三回目の夏」〔小説〕……………244
- 古井由吉「肌」〔小説〕……………266
- 坂上弘「故人(二)」〔小説〕……………300
- 「文芸時評」(座談会)……………333
- 「同人後記」……………359

●一九七八年・三月・春季号——三号

- ・山本健吉「文体と肖像」〔エッセイ〕……………10
- ・中村光夫「呉先生」〔エッセイ〕……………12
- ・新庄嘉章「酒井松男君のことなど」〔エッセイ〕……………15
- ・木俣修「猪の出る村」〔エッセイ〕……………17

【特集】文体とは何かⅢ

- ・木下順一「戯曲の文体」〔評論〕……………20
- ・若林真「Style」〔評論〕……………26
- ・佐佐木幸綱「短歌の文体」〔評論〕……………32
- ・岩田宏「文体、筆写、白羽の矢」〔評論〕……………38
- ・日野啓三「文体」断想〔評論〕……………44
- ・田久保英夫「早春の対話」〔評論〕……………48

- ・平野謙、藤枝静男、中島和夫「私小説と作家の自我」〔座談会〕……………54
- ・大岡信「移植」〔エッセイ〕……………82
- ・野口富士男「なぜ秋声か」〔評論〕……………98
- ・岡松和夫「芥川龍之介論——作家による作家論Ⅲ」〔評論〕……………106
- ・上田三四二「内なる自然(三)——わが生の身体的検証」〔評論〕……………119
- ・黒井千次「のための」〔小説〕……………142
- ・笠原淳「測量行」〔小説〕……………161
- ・米村晃多郎「赤蝦夷松」〔小説〕……………201
- ・小島信夫「ルーツ前書(三)」〔小説〕……………226
- ・古井由吉「湯」〔小説〕……………244
- ・高井有一「遺された歳月」〔小説〕……………274
- ・後藤明生「法事前の数日」〔小説〕……………296

●一九七八年・六月・夏季号——四号

- ・坂上弘「故人(三)」〔小説〕……………322
- ・「文芸時評」〔座談会〕……………348
- ・「同人後記」……………375
- ・丹羽文雄「水脈」について〔エッセイ〕……………40

【特集】文体とは何かⅣ

- ・佐藤朔「写真入りの小説」〔エッセイ〕……………12
- ・小沼丹「アテネの時計」〔エッセイ〕……………14
- ・石原八束「忘れな草」〔エッセイ〕……………17
- ・黒井千次「二人の男と赤い服」〔評論〕……………20
- ・吉増剛造「かたちと文体」〔評論〕……………26
- ・岡野弘彦「歌人と文体」〔評論〕……………32
- ・木村浩「文体随想——ロシア作家の文体をめぐって」〔評論〕……………38

- ・小島信夫「篠田一士「普遍性ということ」〔対談〕……………45
- ・永井龍男「日常片々」〔エッセイ〕……………74
- ・加賀乙彦「野上弥生子論——作家による作家論Ⅳ」〔評論〕……………86
- ・上田三四二「内なる自然(四)——わが生の身体的検証」〔評論〕……………98
- ・藤枝静男「半僧坊」〔小説〕……………118
- ・高橋昌男「昼酒」〔小説〕……………130
- ・飯島耕一「N医師とのこと」〔小説〕……………173
- ・岡田睦「葦のいとなみ」〔小説〕……………200
- ・小川国夫「崖の絵」〔小説〕……………238
- ・小島信夫「ルーツ前書(四)」〔小説〕……………249
- ・古井由吉「背」〔小説〕……………262

●一九七八年・九月・秋季号——五号

- ・高井有一「眠らぬ家族」〔小説〕……………296
- ・後藤明生「花山里」〔小説〕……………318
- ・坂上弘「故人(四)」〔小説〕……………342
- ・「文芸時評」〔座談会〕……………368
- ・「同人後記」……………391

【特集】文体とは何かⅤ

- ・小野十三郎「倒立する三角——ある詩の文体」〔評論〕……………20
- ・金子兜太「是がまあ・俳句の文体のこと」〔評論〕……………28
- ・宮本研「形姿と律」〔評論〕……………32
- ・蓮實重彦「文体の悲慘Ⅱ文体の栄光」〔評論〕……………38
- ・清岡卓行「文体と〈他人の空似〉」〔評論〕……………44

- ・尾崎一雄、安岡章太郎「昭和文学——奈良時代」〔対談〕……………50
- ・遠藤周作「精霊ながし」〔エッセイ〕……………87
- ・嘸岐康隆「純文学と大衆文学——そのルーツをさぐる」〔評論〕……………98
- ・尾高修也「谷崎潤一郎論——作家による作家論Ⅴ」〔評論〕……………104
- ・上田三四二「内なる自然(五)——わが生

・の身体的検証〔評論〕……………	122
・三木卓「遊」(小説)……………	148
・小関智弘「遊べない日々」(小説)……………	162
・稲垣恵庸「火柘榴」(小説)……………	184
・小島信夫「ルーツ*前書(五)」(小説)……………	214
・古井由吉「首」(小説)……………	230
・高井有一「裸木」(小説)……………	260
・後藤明生「夜に帰る」(小説)……………	280
・坂上弘「故人(五)」(小説)……………	307
・「文芸時評」(座談会)……………	332
・「同人後記」……………	359

●一九七九年・二月・新年号——六号	
・川崎長太郎「心境断片」(エッセイ)……………	10
・飯沢匡「姉の詠草」(エッセイ)……………	12
・野崎韶夫「オペラ《鼻》について」(エッセイ)……………	15
・八木義徳「新しい視点」(エッセイ)……………	17

【特集——文体とは何かⅣ】	
・鮎川信夫「文体的思考」〔評論〕……………	20
・種村季弘「マイナーの文体について」〔評論〕……………	26
・色川武大「文体についてかどうかわからない」〔評論〕……………	32
・加島祥三「文体とは何か——フォークナーを通して」〔評論〕……………	36
・福島泰樹「四五日はへ躁やがて暗澹」〔評論〕……………	42
・桶谷秀昭「文体、気質と普遍」〔評論〕……………	48
・渡辺守章「仮面と風景——観世寿夫に」〔評論〕……………	54

・大岡昇平、丸谷才一「翻訳と文体」〔対談〕……………	91
・唐木順三「共同体について」(エッセイ)……………	92
・宮原昭夫「私小説と芸術至上主義——作家による作家論Ⅵ」〔評論〕……………	112
・暉峻康隆「純文学と大衆文学——そのルーツをさぐる(一)」〔評論〕……………	120
・沢田充茂「疑似原始生活について」〔評論〕……………	127
・金鶴泳「剝離」(小説)……………	140
・森内俊雄「朝の板」(小説)……………	166
・上田三四二「転校」(小説)……………	179
・小島信夫「美濃」(小説)……………	192
・古井由吉「子」(小説)……………	208
・高井有一「旅の夜更け」(小説)……………	242
・後藤明生「通院」(小説)……………	263
・坂上弘「故人(六)」(小説)……………	279
・「文芸時評」(座談会)……………	307
・「同人後記」……………	335

●一九七九年・三月・春季号——七号	
・手塚富雄「繰り返しについて」(エッセイ)……………	10
・戸板康二「左右一対」(エッセイ)……………	12
・窪田章一郎「郷里」(エッセイ)……………	15
・田中千禾夫「うつりゆくよしなし事」(エッセイ)……………	17

【特集——文体とは何かⅣ】	
・谷川俊太郎「文体問答」〔評論〕……………	20
・山口昌男「文化の中の文体」〔評論〕……………	26

・岡井隆「短歌の〈文体〉について」〔評論〕……………	32
・高橋英夫「文体と身体」〔評論〕……………	38

●一九七九年・六月・夏季号——八号	
・草野心平、庄野潤三「天地万物とともに」〔対談〕……………	44
・三浦朱門「山のあなた」(エッセイ)……………	66
・高橋昌男「仮装した近松秋江——作家による作家論Ⅶ」〔評論〕……………	79
・暉峻康隆「純文学と大衆文学——そのルーツをさぐる(二)」〔評論〕……………	90
・立原正秋「水仙」(小説)……………	101
・上田三四二「片居」(小説)……………	117
・立松和平「光匂い満ちてよ(前)」(小説)……………	136
・小島信夫「美濃(七)」(小説)……………	241
・古井由吉「道」(小説)……………	258
・高井有一「山の鎖まり」(小説)……………	294
・後藤明生「宝船」(小説)……………	317
・坂上弘「故人(七)」(小説)……………	335
・「文芸時評」(座談会)……………	364
・「同人後記」……………	383

●一九七九年・六月・夏季号——八号	
・飯田龍太「山の湯」(エッセイ)……………	14
・森銑三「五日間」(エッセイ)……………	17
・頃谷雄高「難解な文章」(エッセイ)……………	10
・山室静「シンデレラ話余談」(エッセイ)……………	12

【特集】文体とは何かⅢ	
・山口瞳「文体とは何か」〔評論〕	20
・木島始「文体とStyleを抱きかかろうして」〔評論〕	26
・池田健太郎「机辺にて」〔評論〕	32
・柄谷行人「文体について」〔評論〕	38
・中野孝次「形なき姿なり」〔評論〕	43

・中村光夫、黒井千次「戯曲と小説の間」〔対談〕	48
・阿川弘之「葬式鯉——下曾我訪問記」〔エッセイ〕	70
・森内俊雄「北条民雄再読——作家による作家論Ⅶ」〔評論〕	81
・唐木順三「夢雑記」〔評論〕	90
・平岡篤頼「井伏鱒二覚書——物語の氾濫」〔評論〕	105
・米村晃太郎「峠」〔小説〕	117
・立松和平「光匂い満ちてよ」〔小説〕	129
・小島信夫「美濃(八)」〔小説〕	221
・古井由吉「葛」〔小説〕	238
・高井有一「行きずりの影」〔小説〕	275
・後藤明生「まてら城」〔小説〕	297
・坂上弘「故人(八)」〔小説〕	321
・「文芸時評」〔座談会〕	336
・「同人後記」	355
●一九七九年・九月・秋季号——九号	
・川崎長太郎「泊旅行」〔小説〕	10
・上田三四二「鷺娘」〔小説〕	26
・辻井喬「寝苦しい夜」〔小説〕	39

・高橋昌男「桃乃湯」〔小説〕	56
・野津決「錆びた船」〔小説〕	110
・加賀乙彦、李恢成「長編小説について」〔対談〕	136
・武満徹「死の巡り」〔エッセイ〕	180
・中野孝次「うなだれた首——連載エッセイI」〔エッセイ〕	189
・金子昌夫「苦悩と喪失——現代文学の転換」〔評論〕	202
・小島信夫「美濃(九)」〔小説〕	220
・古井由吉「宿」〔小説〕	236
・高井有一「雀夜」〔小説〕	272
・後藤明生「吉野大夫(一)」〔小説〕	294
・坂上弘「冬景色」〔小説〕	314
・「同人時評」尹興吉著「長雨」について〔座談会〕	341
・「同人後記」	359

●一九八〇年・一月・新年号——一〇号	
・上田三四二「妙見」〔小説〕	10
・小久保均「島の中」〔小説〕	28
・小島信夫「美濃(十)」〔小説〕	49
・横山ちはる「春のバイヤッス」〔小説〕	57
・吉野英生「変装のあと」〔小説〕	109
・新谷敬三郎、桶谷秀昭、小島信夫「日本文学の中のロシア文学——ゴッゴリ、ドストエフスキーからフォルマリズムまで」〔座談会〕	150
・中野孝次「事物のアナーキーのなかで——連載エッセイII」〔エッセイ〕	189
・坂内正「審判」その発端と結末〔評論〕	210

・中村博保「文体とレトリック」〔評論〕	228
・古井由吉「雨」〔小説〕	239
・後藤明生「吉野大夫(二)」〔小説〕	272
・高井有一「水底の魚」〔小説〕	292
・坂上弘「隣人」〔小説〕	315
・後藤明生、坂上弘、高井有一、古井由吉「蒲団」と「露骨なる描写」をめぐって〔シンポジウム〕	331
・「同人後記」	351

●一九八〇年・三月・春季号——一一号	
・上田三四二「深んど」〔小説〕	10
・岡田睦「愚かもの譜」〔小説〕	25
・稲垣恵庸「樟の香」〔小説〕	69
・米村晃多郎「カムイ・チェブ」〔小説〕	102
・樋口至宏「数え日」〔小説〕	113
・佐藤睦子「そのまの西日」〔小説〕	138
・森山純吉「聖母子像」〔小説〕	166
・岩橋邦枝「落葉樹」〔小説〕	189
・大岡信、粟津則雄、安東次男「言葉つまりたる時を」〔座談会〕	205
・彌永昌吉「文と人——数学者による文章論」〔評論〕	226
・中野孝次「黄金伝説——連載エッセイIII」〔エッセイ〕	233
・小島信夫「美濃(十一)」〔小説〕	252
・高井由吉「声」〔小説〕	268
・高井有一「犬の眠り」〔小説〕	300
・後藤明生「吉野大夫(三)」〔小説〕	320
・坂上弘「川辺の町」〔小説〕	338
・後藤明生、坂上弘、高井有一、古井由吉「正宗白鳥「死者生者」」〔シンポジウム〕	365

・「同人後記」……………383

●一九八〇年・六月・終刊号——二月号

- ・加賀乙彦「文体と形而志孝——『宣告』ノトより」(エッセイ)……………10
- ・三木卓「繰り返された過程——『野いばらの衣』の場合」(エッセイ)……………28
- ・高橋昌男「鳥獣の舟」(小説)……………47
- ・尾高修也「東京の空」(小説)……………87
- ・川村二郎「様式について——東京神社考」(評論)……………146
- ・久保田正文「現代の、新しいテーマ」(評論)……………159
- ・桶谷秀昭「正岡子規の文章」(評論)……………172
- ・中野孝次「一方通行——連載エッセイⅣ」(エッセイ)……………199
- ・長部日出雄「神話世界の太宰治」(評論)……………211
- ・上田三四二「補助線」(小説)……………241
- ・小島信夫「美濃(念元)」(小説)……………256
- ・古井由吉「親」(小説)……………293
- ・高井有一「門出」(小説)……………326
- ・坂上弘「家路」(小説)……………346
- ・後藤明生「吉野大夫(念元)」(小説)……………370
- ・「同人後記」……………410

◆文芸時評座談会、対象作品一覽(掲載誌、年月は『文体』の表記に拠る)

- ・一号……吉田知子「脳天壊了」(『新潮』五月号)、立松和平「荒れた光景」(『すばる』六月号)、阿部昭「日をあびて」(『文芸展望』夏号) 昭和五十二年六月二十四日・秋本にて

- ・二号……岡田陸「穏やかな部屋」(『新潮』九月号)、本田元弥「スペース・セールスマン」(『文芸』八月号)、尾高修也「部屋の明るみ」(『文体』第一号)

昭和五十二年九月八日・編集室にて

- ・三号……小関智弘「錆色の町」(『文学界』十一月号)、津島佑子「歓びの島」(『海』新年月号)、阿部昭「過ぎし樂しき年」(『新潮』十二月号)、昭和五十二年十二月十四日・同前
- ・四号……宮本輝「道頓堀川」(『文芸展望』四月号)、中野孝次「雪ふる年よ」(『文芸』三月号)、昭和五十三年四月五日・同前
- ・五号……丸山健二「祭り」(『新潮』五月号)、高橋揆一郎「伸予」(『文芸』六月号、色川武大「血」(『海』六月号) 昭和五十三年六月二十四日・同前
- ・六号……高城修三「満願」(『新潮』八月号)、三田誠広「どうせぼくなんか」(『文学界』八月号)、高橋三千綱「少年の島」(『文学界』九月号) 昭和五十三年十月二日・同前
- ・七号……中上健次「水の女」(『文学界』十一月号)、岡松和夫「屈辱」(『新潮』十二月号) 昭和五十三年十二月十八日・同前
- ・八号……藤枝静雄「みな生きものみな死にもの」(『群像』二月号)、野坂昭如「不法出国者」(『海』三月号) 昭和五十四年三月二十八日・同前
- ・九号……尹興吉「長雨」生舜訳(東京新聞出版局 七九年四月) 昭和五十四年七月十三日・同前

